

本稿は、相撲趣味の会誌「相撲趣味」に掲載されたもので、内容の無断転載を禁じます。書誌情報の詳細は文末を参照して下さい。転載等の希望は相撲趣味の会に問い合わせして下さい。

「雲早山」を名乗った力士たち

笠原 二郎

はじめに

地域の名峰を力士のしこ名に採用する例は、古今東西枚挙にいとまがない。筆者が暮らす徳島でも、江戸時代寛政年間の関取から始まった勢見山、天保と明治の大関二代が名乗った剣山、明治の大坂横綱が名乗った高越山などが知られる。雲早山は、徳島県名西郡神山町、勝浦郡上勝町、那賀郡那賀町の、境界付近に位置する標高一、四九六メートルの山で、南東に隣接する高丸山と並んで、ブナなど原生林の中を縦走する人気コースとして親しまれる（図一）。地域の呼称は「くもそうやま」だが、国土地理院「点の記」には「クモスヤマ」とあり、力士のしこ名としては「くもさやま」と呼ばれるのが、おそらく一般的であろう。

筆者は令和二年十二月二十日から三年三月二十日まで、徳島大学ガレリア新蔵展示室にて「続 阿波の相撲史展」を主催し、テリマの「一つとして「雲早山」を名乗った力士七人を紹介した。その後、本展終了以降も含めこれまで、に調査した限りでは、よく知られる江戸の大相撲幕内力士が三人、幕末には、尾張の相撲集団に属して大坂相撲の上取りになった力士が一人、嘉永と明治の京都に二人、明治大正期は東京大相撲と大阪大相撲の幕下以下にそれぞれ二人ずつ計四名、明治二十年代の東北地方相撲興行番付に上総頭書の雲早山が一人、以上合わせて十一人の雲早山が見出された。特に江戸の幕内力士三人は諸先輩情報により十分研究された。記述されている感があり、十一人の概説する。追記・新規情報を中心に、十一人の雲早山を

書から窺えず、今後、徳島藩側の記録等を精査する必要がある。また、大坂でも江戸でも先代雲早山とは異なる部屋に属した彼が、どのような経緯でこのしこ名を乗ったのか、是非知りたいところである。

雲早山鉄之助（弘化／嘉永、江戸）

徳島（現美馬郡つるぎ町半田日開野）出身力士として初めて雲早山を名乗り、現役引退後は大坂で湊由良右衛門忠直を襲名して、幕末から明治初期の大坂（阪）角界の重鎮であったことは、周知の通りである。文武両道に長けていたとされるが、紀州徳川家に伝わる武術体系・関口流の免許皆伝者である。生家の西原家に残る古文書のうち、「関口流十五箇条」は主に柔術を主体とした身体技法や心得の目録で、文政十年十一月に西原米蔵宛、また主に居合・太刀・小太刀など剣術を主体とした「関口流目録」は天保二年正月に西原米吉宛、いずれも一條榮太郎與信、田所丹左衛門光邦らから伝授されている。文化十一年が生年ならば前者は満十三歳、後者は満十七歳と推定され、角界入門前にこのようなきわめて優れた身体能力を有していたことは、当時黒雲と名乗っていた後身の不知火諾右衛門が、父と同じく医師になるため上坂した彼を湊部屋にスカウトしたと同じく医師になるため上坂し与えうる。

諸文献に拠れば、天保六年に大坂本場所番付初掲載、江戸は境川門人で天保十年十一月が幕下格番付外、翌場所番付初掲載、十五年正月まで矢筈山鉄之助を名乗っているが、これも故郷の山の名であり、現在も生家の玄関先からその山頂が眺められる（図四）。十五年十月から弘化二年十月まで雲早山森之助、以降は雲早山鉄之助と名乗っている。

余談だが、福沢諭吉の「福翁自伝」には湊部屋に関する記述がある。適塾入塾直前、諭吉が遊学先の長崎から船と徒歩で大坂に到着し、幼少時の知己たちと再会して旧交を温める場面。かつて諭吉の守りをしていた奉公人の武八という男と堂島界隈を散策した折に、武八が、當時は毎日幼い諭吉を抱いて湊の部屋に相撲の稽古を見に行った、部屋はそっちの方だと指で示しながら言うので、諭吉は懐かしさに涙した、という。諭吉は天保五年大坂

しれないが、現時点で現役引退後の詳細は不明である。

京都の雲早山（嘉永の平吉、明治の竜太郎）

前名は早くも（はやくも）とあるが、これ以上の情報は現在のところ得られていない。ちなみにこの改名付上段には、雲早山鉄之助も記載されている。また宇治の雲早山の一枚下は肥後頭書の殿峯五郎がおり、後の不知火光右衛門であろう。明治十六年九月に京都祇園町花見小路で開催された角力興行番付には、東三段目二枚目にヨ頭書の雲早山竜太郎がいる。同時期の大阪本場所番付など調査したが、同じしこの名の力士は見当たらなかった。調査した所番付は極めて少なく、筆者が調査できた京都相撲の本場所

雲早山吉蔵（明治、大阪・東京）

この力士は徳島出身で、明治十七年九月の大阪本場所西序二段にアハ頭書の藤の森林蔵として記載されたのが初見である（表二）。大阪の所属は改名付など記載がないので現在のところ不明であるが、もし湊であれば元阿波力士・小天狗雷蔵の弟子である。東京の大相撲番付は明治二十年一月に三段目の藤ノ森吉三で初見、所属は初代梅ヶ谷の雷であつた。前年の明治十九年五月に大阪から移籍して三段目格番付外で白星一つ挙げている。明治二十一年一月から三場所続けて番付に名前が無いもの（兵役だろうか？）二十二年一月は番付外で三勝二敗、同年五月に再び三段目上位に名が載り、その翌二十三年一月に幕下昇進している。その後も幕下にいて、二十六年五月は西幕下三枚目、この時の番付しこ名は藤ノ森だが、初日から幕下雲早山に改名して勝ち越している。翌場所番付外で幕下格、二十七年五月は東幕下二枚目で十両を窺うも三勝三敗、二十八年一月は西幕下三枚目で三戦全敗、番付では翌場所が最終場所になったが全休、残念ながら十両昇進は叶わないまま廃業したようだ。その後

の同時期に萩ノ森和助という武蔵川門人（剣山谷右衛門
ノ森としのぎを削っていたが、萩ノ森は明治二十七年一
月に十両昇進して翌場所も十両、二十八一年一月に幕下陥
落して、その場所限りで引退したようだ。

雲早山昇市（大正、東京）

大正五年一月の東京大相撲番付、東序ノ口十九枚目に、
東京頭書の雲早山正市（後に昇市）が二所ノ関部屋から
登場している。これ以前の大阪大相撲番付にそれらしき
名は見当たらず、最初から東京大相撲に入ったと思われる
。現役の間は三年、自己最高位は大正七年五月の西
序二段十一枚目、最終場所の大正八年一月は全休して、
廃業したのだろう（表三）。頭書は全て東京、出身地は
不明である。

大阪大相撲の雲早山（磯吉、春太郎）

明治三十年九月の大阪番付、東幕下三十二枚目に、九
州頭書の雲早山磯吉がいる。この場所は全休で、明治三
十二年六月に番付外で四戦全敗。翌明治三十三年六月の
番付には東幕下二十三枚目に、アハ頭書の同名力士が掲
載されて、いるが、全休したようである。同時期の徳島相
付などにも調査しているが、現在のところ、明治二十九年
十一月に富田中洲で行かれた東京・大阪・徳島合併大
相撲の徳島方番付西幕下に、磯の森磯吉という力士を見
出した以外、それらはい手がかりが得られていない。雲
早山春太郎がいるが、この場所限りで以降は名が無い。

上総の雲早山（久之助）

明治二十年代の東北地方興行番付中（東大関が津軽の
一ノ矢藤太郎、西大関は西京頭書の小野川才助）、上総頭
書の雲早山久之助が東小結にしていることを、小池謙一氏か
らご教示いただいた。この興行が一ノ矢の現役時代であ

れば、前述した雲早山吉蔵は当時まだ藤ノ森のしこ名を
名乗っていただけで、一方、雲早山久之助は東京大相撲に
は出場していた筈の、雲早山久之助の名乗る地方強
豪力士だったと推察され、勝ノ浦との関係有無などに興
味が惹かれる。

おわりに

調査した十一人の力士のうち、徳島出身者が三人、これま
で四人のようだった。初代森之助と嘉永の鉄之助がともに大坂
湊門人であつたことから、主として湊の人脈に受け継が
れたと考へるべきであらうか？言うまでもなくそのよう
な人脈は絶えて久しく、徳島出身の現役大相撲力士は、
令和三年三月場所後に太田が引退して三人だけになつた。
近い将来、雲早山を名乗る阿波力士が登場すること願
てみたい。まだ見落とすところがあるが、雲早山を探し

謝辞

本稿をまとめるにあたり、剛田明治氏、小池謙一氏、
小池弘悌氏、神山雅孝氏、土井伸一郎氏、西原アサコ氏、
山下和也氏、徳島県立文書館に調査ご協力頂きました。
この場を借りて心より感謝申し上げます。

参考文献

- 金剛傳（天保十四年刊）
相撲起頭十輯（明治四年刊、三河屋治右衛門）
福翁自伝（明治三十二年、福澤諭吉、時事新報社）
日本相撲史上巻（昭和三十一年刊、酒井忠正、ベース
大相撲人物大事典（平成十三年刊、「相撲」編集部、
ベースボール・マガジン社）
年寄名跡の代々 67 湊代々の巻（中）（小池謙一、「相撲」
平成七年四月：152-155）



図一 雲早山山頂（左）と山頂付近の原生林（右）



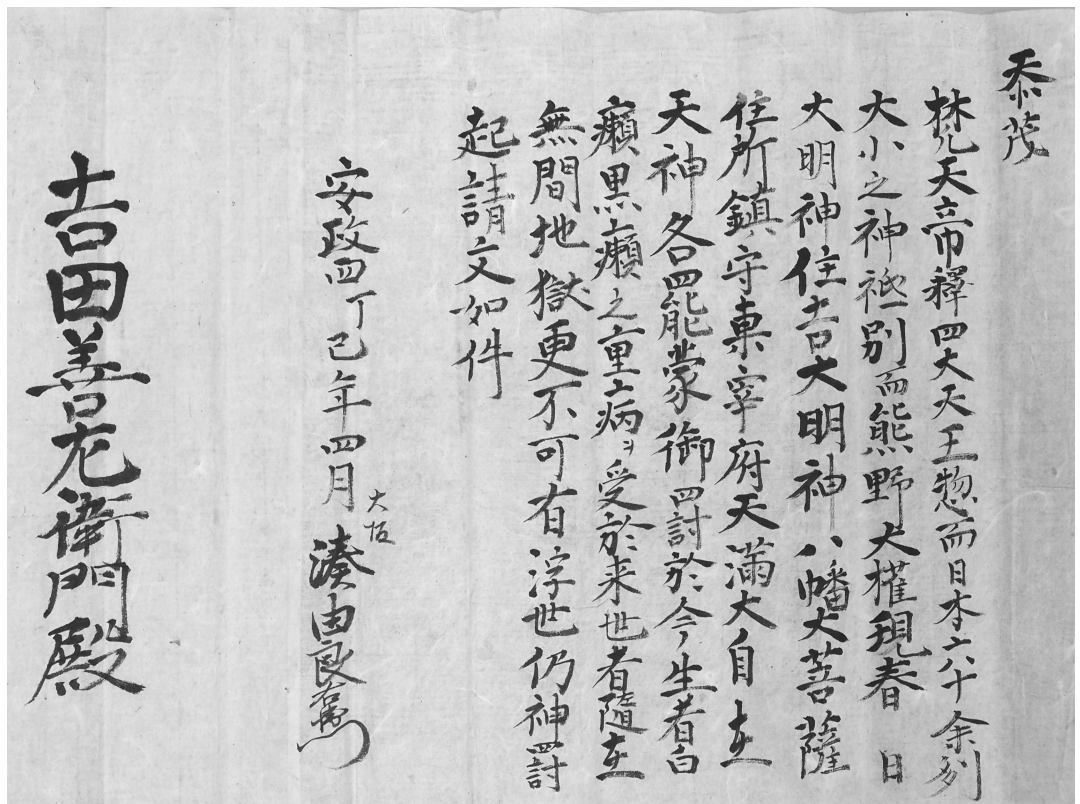
図二 勝川春英の筆による雲早山森之助（文化文政期）錦絵、いずれも徳島県立文書館蔵



図三 金剛傳から（左、天保十四年） 改名付から（右、嘉永元年）



図四 雲早山鉄之助の生家から望む矢筈山（矢印）



図五 湊由良右衛門から吉田善左衛門に宛てた起請文（控？）

和暦	西暦	相撲興行地	番付地位	頭書	四股名
安政3年6月	1856	桑名(走井山)	西三段目15		雲早山 茂十郎
安政4年8月	1857	大坂	東幕下106	ヲワリ	雲早山 茂十郎
安政5年6月	1858	大坂	東幕下107	ヲワリ	雲早山 茂十郎
安政6年7月	1859	大坂	西幕下28	ヲワリ	雲早山 茂十郎
万延元年6月	1860	大坂	東幕下29	ヲワリ	雲早山 茂十郎
万延元年9月		桑名(春日社)	西三段目6	大坂	雲早山 茂十郎
文久元年5月	1861	大坂	東幕下9	ヲワリ	雲早山 最十郎
文久2年6月	1862	大坂	東中25	ヲワリ	雲早山 最十郎
文久2年10月		名古屋(七ツ寺)	西三段目3	大坂	雲早山 茂十郎
文久3年6月	1863	大坂	西中28	ヲワリ	雲早山 最十郎
元治元年6月	1864	大坂	西中24	ヲワリ	雲早山 最十郎
元治元年?		松阪?(中相撲)	東前頭2	ヲハリ	雲早山 茂十郎
慶応元年7月	1865	大坂	西前頭10	ヲワリ	雲早山 最十郎
慶応2年7月	1866	大坂	西前頭6	ヲワリ	雲早山 最十郎

表一 雲早山茂十郎の番付履歴

和暦	西暦	相撲興行地	番付地位	頭書	四股名	勝敗	備考
明治17年9月	1884	大阪	西序二段21	アハ	藤の森 林蔵	4-4	
明治18年10月	1885	大阪	東序二段24	アハ	藤ノ森 吉蔵	全休	
明治19年5月	1886	東京	番付外		藤ノ森	1-0	三段目格
明治20年1月	1887	東京	西三段目9	東京	藤ノ森 吉三	2-1	
明治20年5月		東京	東三段目14	東京	藤ノ森 吉三	3-2	
明治21年1月	1888	東京					
明治21年5月		東京					
明治22年1月	1889	東京	番付外		藤ノ森	3-2	三段目格
明治22年5月		東京	西三段目8	東京	藤ノ森 吉三	5-0	
明治22年9月		大阪(東京方)	西三段目筆頭	東京	藤の森 吉蔵		
明治23年1月	1890	東京	西幕下31	東京	藤ノ森 吉蔵	3-2	
明治23年5月		東京	東幕下25	東京	藤ノ森 吉蔵	1-4	
明治24年1月	1891	東京	東幕下31	ア州	藤ノ森 吉蔵	3-2	
明治24年3月		大阪(東京方)	西幕下12	東京	藤の森 吉蔵		
明治24年5月		東京	西幕下20	ア州	藤ノ森 吉蔵	2-3	
明治25年1月	1892	東京	西幕下20	東京	藤ノ森 吉蔵	1-1-1分	
明治25年6月		東京	西幕下23	東京	藤ノ森 吉蔵	4-1	
明治26年1月	1893	東京	西幕下7	東京	藤ノ森 吉蔵	2-2-1預	
明治26年5月		東京	西幕下3	東京	雲早山 吉蔵	3-1	番付は藤ノ森、初日に雲早山へ改名
明治27年1月	1894	東京	番付外		雲早山	2-1	幕下格
明治27年5月		東京	東幕下2	東京	雲早山 吉蔵	3-3	
明治28年1月	1895	東京	西幕下3	東京	雲早山 吉蔵	0-3	
明治28年6月		東京	西幕下17	東京	雲早山 吉蔵	全休	

表二 雲早山吉蔵の番付履歴

和暦	西暦	相撲興行地	番付地位	頭書	四股名	勝敗
大正5年1月	1916	東京	東序ノ口19	東京	雲早山 正市	2-3
大正5年5月		東京	西序ノ口5	東京	雲早山 正市	4-1
大正6年1月	1917	東京	西序二段52	東京	雲早山 庄市	1-3-1分
大正6年5月		東京	東序二段65	東京	雲早山 庄市	1-4
大正7年1月	1918	東京	西序二段67	東京	雲早山 昇市	6-2
大正7年5月		東京	西序二段21	東京	雲早山 昇市	1-4
大正8年1月	1919	東京	西序二段36	東京	雲早山 昇市	全休

表三 雲早山昇市の番付履歴

相撲趣味 第191号 (非売品)

令和3年 (二〇二一年) 5月31日発行

発行所 相撲趣味の会

東京都墨田区東向島三―三七―七―五〇八
野中方 (〒131・0032)

☎〇三―三六一〇―一八一六

編集兼 郵便振替 (〇〇―一七〇―三一五六七六九)

小池 謙 一

東京都三鷹市牟礼二―一四―一四―六〇一
(〒181・0002)

☎〇四―二二四四―五六一二

製作 (株) 医聖社

東京都千代田区西神田二―七―四 島崎ビル
(〒101・0065)

☎〇三―三二六四―八六三九